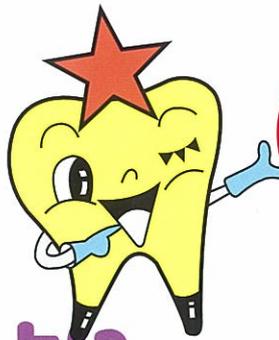


夢みる こども基金



No. **6**

〈平成13年〉
10月10日

発行:夢みるこども基金事務局

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-6 赤坂Sビル2F ☎ 092-751-0021 FAX 092-751-0249

ホームページ:<http://www.standbyyou.com/yumemirukodomo> Eメール:yumemirukodomo@standbyyou.com



▲アグネス・チャンさんを先頭に会場周辺をラウウォーク

2001 夢みるこどもキャンペーン

第七回イベント

「バリアフリーの社会をつくる」シンポジウム

企画から運営まですべて子供たちの手で

歯の金属冠リサイクルで子供たちの夢をかなえ、福祉にも役立てようと活動を続けている「夢みるこども基金」(理事長・白田貞夫日本歯科医師会会長)の七回目のイベントが8月5日、福岡市早良区百道浜のTNC放送会館で開催。今年も、全国の小、中学生から募った作文とイラストの中から愛知県私立聖霊中学校一年・下中美香さんの作文をもとに、「バリアフリーの社会を作ろう」をテーマに、シンポジウムが開かれました。

例年と異なり、企画から運営まで全て子供たちの手で進められ、子供たちで組織した「実行委員会」のメンバーは、何回も会合を重ね、実際に、車イスなどの疑似体験をしたり、施設を見学し、バリアフリーへの理解を深めていきました。

当日は、実行委員をはじめとする全国の子供たち二十三人が参加。理事のアグネス・チャンさんも応援にかけつけて下さいました。

シンポジウムに先がけて、疑似体験コーナーが設けられ、盲導犬、アイマスク、点字、手話、老人、車イスの各コーナーでは、子供たちに一般市民も加わり、ハンデを持つ人の不自由さなどを体験しました。

この後、ラウウォークに引き続き、シンポジウムが開かれ、二百人を超える聴衆を前に、私たちは活発な意見や提言を続けました。一言で「バリアフリー」といっても、とても奥が深く、目に見える部分だけではなく、一人ひとりの「心のバリア」を取り除くことが最も大切だという結論になりました。私たちのこんな思いを「こども宣言」にまとめ、小泉首相を始め、関係者に発信しました。このシンポジウムが少しでもこれからの社会に役立ていくことを望んでいます。

全国の歯科医師などの協力で1994年(平成6年)に福岡市で始まったキャンペーンは、日本歯科医師会をはじめ、多くの人たちの全面的なバックアップで子供たちの夢を育みながら力強く発展しています。

点字コーナー

点字は、皆さんもよく知っているように、目の不自由な方の交流手段であり、点で表された文字です。ほとんど点字に触れることのなかった私たちに交流の幅を広げてくれました。点字表とにらめっこしながら、一つ一つ心をこめて点字を作り上げていました。点字を打つのが初めてだという人にも、点字について興味を抱いてもらえたと思います。

たくさんの先生方に点字を教わり、ごちない手つきながらも立派に完成した自分の名前に感動した人たちがとても印象的でした。

この点字の疑似体験を通して、一人でも多くの人が、これから点字を勉強し、よりたくさんの人と楽しく交流できるようになることも一つの大きなバリアを乗り越えることになると思いました。

手話コーナー

耳の聞こえない人にとって、耳であり口である手話の大切さを体験してもらうために、このコーナーは設けられました。

日本全国で手話のできる人はとても少ないのが現状です。各地で手話を学習する会のようなものが催されていますが、そんなに普及していません。耳の聞こえない人の数にあっていないのは事実なのです。

今回手話コーナーでは自分の名前を手話でやってみたり、手話で歌を歌ったりしました。手話は「やってみるとおもしろかった」という声もあり、これからの生活にいかせたらいいなと思います。耳の聞こえない人達に気軽に、そして楽しくコミュニケーションをとれる人が増え「心のバリア」がなくなつて欲しいです。

盲導犬コーナー

二頭のおとなしい盲導犬が順番を待ち望んだお客様を次々と冷静に迎え入れ、やさしく横に寄り添った。アイマスクをして緊張した体験者は異常に肩に力が入り、手に汗を感じながらハーネスを握っていたが、ボランティアの方から「自分で歩こうとせず、盲導犬にまかせて」という言葉がかかると、ごちない歩きがより自然な形となつていった。わずか数メートルの往復だったが、体験者の一人は、「盲導犬との信頼関係が一番大切ですね」と汗ばんだ顔からアイマスクをはずし、笑顔で話していた。



老人体験コーナー

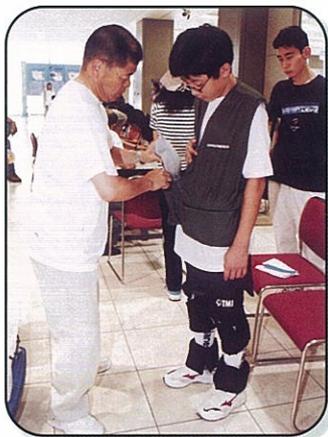
急速に進む日本の高齢化。「老いる」とは、誰もが避けて通れない「みんなの階段」です。そこで、今回の疑似体験では、「老いること」でわかる大変さを体験しても

らおう」ということで「老人コーナー」を設置しました。

老人になると、手足の不自由さだけでなく、視力の低下が現れてきます。そうになると、日常生活での動作一つ一つが大変なものとなり、最終的に寝たきりになつてしまいます。しかし、バリアフリー社会になることで、老人が住みやすい環境になればいいと思います。

老人体験コーナーでは、おもりのたくさんついた服を着て歩いてもらいました。体験し終えた人に感想を聞いてみると、「自分の体じゃないみたいでした」とのことでした。

今回の体験を通して、みんなが「老人」などが住みやすい社会にするために、個人に何が「できるか」を考えるきっかけになれば...と思えました。



車イスコーナー

何台も用意された車イスに座ってから介助者に片足ずつ踏み台に乗せてもらうことから始まり、そこから会館ロビーの外へ出た。外では、コーンを置いてジグ



ザグに走行したり、段差を設けてあったりして、体験者一人ひとりに障害を持つ方々が丁寧に教えていた。ジグザグ走行は右手左手のバランスが大事で、また、ほんのわずかな段差でも乗り越えるのに力を要し、しかも乗り上げるよりも降りるときの方が、体が前につんのめりそうで、多くの人が怖がっていた。ほとんどの人が直線コースでもビルよりはずれていく。関係者の方の話によると、実社会では、平らな道というのは、まずなく、歩道でも雨水の流れを考えてほんのわずかな傾斜になっているそうだ。車椅子の広げ方、たたみ方も教わり、車イスにも重さ、幅、機能などの違いにより数多くの種類があることも知った。

ラヴ・ウォーク

シンポジウムへの参加呼びかけのため、34℃の炎天下、私たちはラヴ・ウォークを行いました。アグネス・チャンさんを先頭に、全国からきた子供、それに役員、ボランティア、付き添いの父母などが、会場のTNC放送会館を出発し、福岡タワー周辺を20分かけて、「バリアフリーの社会を作りましょう」と呼びかけながら歩きました。夏休みだったため、会場周辺には多くの人っていて、私たちの呼び掛けに耳を傾けて下さったことに感謝しています。

その成果もあってか、シンポジウムにはたくさんの方が集まって下さいました。ラヴ・ウォークをしている間、横断幕やプラカードを持っている子供たちの顔は、汗でびしょりになっていました。しかしラヴ・ウォークを終えたみんなの顔には、満足感や充実感があふれていました。



シンポジウム

「バリアフリーの社会実現」 に活発な意見と提言



私たちは、本番に備え、全国から選ばれた「こども会議」のメンバーの中から福岡近郊の子供たちを集めて、こども実行委員会を作り、五月から数回に渡り話し合いを繰り返した。そうした中で、障害者施設を訪問して話を聞いたり、実際に車イスなどを体験した。さらに「目耳口」「手足体」「知的・老人」の三つのグループに分かれ、それぞれがどのような障害を持つのか、どうしたら「バリアフリー」が実現できるかを自分たちで勉強を重ねてきた。それをまとめたレポートに感想を加えたものをシンポジウムで発表していった。その内容は実際に障害者と接し、その苦労を肌で感じてきただけに、うわべだけでなく素直な意見が多かった。主なものは、

- ◇ もっとハンデを持つ人たちとの交流の場を作りたい。
- ◇ 子供の日、敬老の日といったように「障害者」の日を作ってほしい。
- ◇ 盲導犬・介助犬のことをよく理解してもらえず、今回のシンポジウムでも会場使用申し込みを断られたこともあり、悔しかった。
- ◇ 点字の本はとても少なく、そして厚くて重く、値段も高いのに驚いた。
- ◇ 障害者は何もできないのではなく、もっと自分たちの可能性を認めてほしい、との思いが強い。それをできなくさせている社会の改善と周りの人々の心の協力を望んでいる——など。

足に障害を持ち車イスで生活をしているゲストの宮本トキ子さんから、「建物の中に入ったら、まず一階に身障者用トイレがあるかを探す。二、三階にあっても意味がない」と実体験をもとにした感想が述べられた。また、ステージ下、最前列に座っていた「こども会議」の他のメンバーにもマイクを向け、多くの意見を取り入れた。

みんなが一樣に感じたことは、物理的バリアの改善よりも、もっと大切なことは心のバリアを除かねばならないということだった。小さいときから、障害者と接する機会が少ないが故に生じる「どう接してよいかわからない」という戸惑いや、「彼らはなんにもできない」という勝手な思い込みを、まず私たちがなくす、意識の改革が最も必要であるということだ。

また、話し合いの中に障害者ゲストの方々の感想を交えたトークも盛り込まれ、岡崎勝美さん・横田光春君の笑いを誘う明るさに子供たちの緊張もほぐれたようだった。中でも、生まれつきの盲目者である神田好紀先生の「色や景色について、未だに全く想像がつかない」という話には会場のお客様から驚きの声が漏れていた。赤は、トマト、ポスト、黄色は、バナナ、レモンというように、単に頭の中で認識しているだけで、実際は赤や黄色がどんなものか、見当もつかないそうだ。夕日などの景色については、アグネス・チャンさんからも、昔、ボランティアをしたときに「お布団の中の暖かさ」などと表現して教えたらいいいといわれたことがあるとのアドバイスがあった。

私たちが全く当たり前のこととしてとらえていたことが、目の見えない方々にとっては、こんなにも難しいことだったのか、と思い知らされた。知らないことの多さに気付かされながらも、障害を持つゲストの方々と、ごく自然な形で一体化してシンポジウムは進んでいった。

最後に、こども会議メンバー全員がステージに並び、長い「こども宣言」を一言一言かみ締めながら、連携プレーで読み上げた。司会も全て子供たち、という中、ゲストやプロのアナウンサーの方々の陰からの温かいまなざしに後押しされて、無事、一時間半のシンポジウムは幕を閉じた。



2001 夢みる子ども

キャンペーン

— じじも宣言 —

私たち夢みる子ども会議の参加者は「バリアフリー」という大きなテーマを勉強するにつれ、障害をもつ方々が自分の障害そのものよりも、それをとりまく社会全体に対して困り、不満をいだいていらっしゃることを知りました。

実際ここにいる参加者のほとんどが初めて障害をもつ人たちと接し、初めて学ぶことばかりでした。これはおそらく社会全体の縮図だと思えます。いかに私たちが知らないか、そしてそこから知るごとの大切さ、しなければならぬことの多さに気づきました。私たちは、障害をもつ人たちのためにバリアフリーの社会を実現する子どもたちの立場から以下のことを宣言します。

— 政府や行政のみなさまへ —

障害をもつ方々がもと社会で活躍できるよう、門戸を開いて下さい。法律を整備し障害を持つ方々が能力を生かすことができる制度を作り資格をあたえて下さい。政府や行政の決断が社会をどれほど動かすか考えて下さい。バリアフリーの社会を実現するためにまず、物理的バリアの改善をもつとすすめて下さい。

物理的バリアの改善が街中に多く見られるほど、国民一人ひとりの意識も高まっていくはず。報道関係のみなさまへ

— 報道関係のみなさまへ —

私たちはみなさんが、国民ひとりひとりに一番影響をおよぼす力をもっていると考えます。ですから声を大にして言いたいのです。様々な障害をもつ人たちのありのままの姿をもつと紹介して下さい。

障害をもつ人達のご苦労や、障害をもつ人が多くの職場で活躍している様子をテレビの画面や新聞を通して実際に示して下さい。そして、もつと障害を知る仲間を増やして下さい。そうすることにより障害は特別なことではない、ごく普通の身近なことなのだと感じるようになって下さい。

こうした報道が増えれば、障害をもつ人たちにとつてもどんなに希望につながるかしれません。

— 教育関係のみなさまへ —

私たちはまだ障害の意味の深さを知りません。私たちは障害をもつ方々の姿をよく知りません。それは幼いころから障害をもつ人たちと接する機会が少なかつたからだと思えます。私たちは彼らを無視しているわけではありませぬ。どうやって接していいかわからないのです。どうか純粋な子どもたちのときから、そ



れぞれの段階で分かるように、障害に対する知識を教えてください。そして障害を持つ人達と一緒になる機会をたくさん作って下さい。純粋な子どもたちの心から障害に対する偏見を解いてください。

— 全国のみなさまへ —

私たちは一人ひとりがえのない命をもつてこの世に生まれてきました。この尊い命を宿す体や知的能力にたとえ障害をもつていたとしても、愛をもつて純粋に生きるこの意味はなんら変わりありません。それを不自由にさせているのは私たち自身の心の持ち方かもしれません。

二十一世紀は科学技術の時代です。おのずと、物理的バリアは解消されるでしょう。これから私たちに必要なのは、むしろ心のバリアフリーではないでしょうか。一人ひとりの顔や性格が違うように障害も一つの個性です。

「みんな違ってみんないい！」気軽に使われているこの言葉の意味をもう一度深く考えてみませんか。

障害はある特定の人々のことではありません。自分自身を含めて、誰にでも起こりうるということを決して忘れないで下さい。

最後に」 私たちは今、世界が障害をもつ人々に温かい

手をさしのべていることを実感しています。1995年に障害者基本法が制定され、パラスピックも普通のオリンピックと同様にテレビで放送されています。私たちは障害の有無にかかわらず、生きていることの素晴らしさ、人間の無限の可能性を感じ、たくさんの感動をいただきました。さらに今年には国際ボランティア年です。こうして世界的な環境は少しずつ前進しています。では、果たして私たち一人ひとりはどうでしょうか。エイズ、ハンセン病、部落差別：私たちは過去にも現在にも様々な人々の差別や偏見をもつというあやまちを犯してきました。

二十一世紀の今、私たちは偏見を捨て、全ての人が対等に自由に楽しく暮らしていける社会の実現を目指して、一歩ずつ確実に出来ることから進めていきたいと思います。

夢みる子どもキャンペーンは今日一日だけのものではありません。私たちはキャンペーンの輪をさらに広げ、一人でも多くの人たちと手をつなぎあつて、一緒に大きな夢を育てて、二十一世紀を素晴らしい時代にしていきたいと思います。最後に私たちがこうして障害について学ぶ機会を与えて下さった夢みる子ども基金の方々はじめ、貴重な話をして下さったゲストのみなさま、熱心に話をきいて下さった会場のみなさまに深く御礼を申しあげます。

2001年8月5日

第七回夢みる子どもキャンペーン

「バリアフリーの社会を作ろう」

参加者一同

「私達が感じたこと」 イベント実行委員会の リーダーの総括

心のバリアフリー除去が先決

野口 淳美



「バリアフリーの社会を作ろう」というテーマは、私が考えていたものよりも、はるかに難しく、奥深いものでした。「バリア」といえば思い浮かぶのは、段差や道幅などの目に見える物理的なものばかりでした。確かに間違いではないのですが、本当にこれだけを改善すれば「バリアフリーの社会」が作れるのでしょうか。

あまりにも無知だった私は、車イスやアーマスクなどの疑似体験をしたり、施設を訪問していくうちに何か重要なものが欠けていることに気付いたのです。それは、私たちの心のバリアでした。障害に対して十分に正しい理解がされていなかったのです。私は、自分自身がとても恥ずかしく、情けなく思えました。

「バリアフリーの社会」を作るのに最も大切なことは、私たち一人一人の心から見直すことです。今の社会では安心して生活がなくなる人、そんな人がいることはとても不公平です。個性を認め合うことが大事です。それぞれが持っているものをお互いに共有し合える、そんな輝かしい社会になるよう、これからもより多くの人たちが「バリアフリー」について考えてほしいと思います。

見えなかったものが見えてきた

伊豆丸 展代



今まで、何度かバリアフリーという言葉聞いたことはあったけど、

ここまで深くこの言葉の真の意味について考えさせられたことはありませんでした。そしてこんなにも障害者の方々とふれあつたこともありません。私たちは、みんな障害を持つているということに気付かされたのも、このシンポジウムやシンポジウムを行うにあつての学習のお陰です。

今まで見えてこなかったもの、いや、見ようとしていなかったものが見えてきたときの感動は私のこれからの人生の糧になると思っています。というのは、車イスの大変さや、盲目の方々の苦勞が、実際に体験をして初めて分かったからです。それは、このシンポジウムがなかったら絶対に気付かなかつたと思います。最近、バリアフリーとかユニバーサルデザインという言葉が徐々に浸透してきているようですが、まだ、それが表現されていないのも事実です。私たちのシンポジウムがそのきっかけになれば、と思います。

最後に、私たちと一緒に頑張ってくれた全国の子供たち、あなたたちと知り合えて、本当にうれしかったです。人と人の結びつきこそが人生の宝となります。そのきっかけを作ることができた今回のイベントにありがとうを言いたいです。これからもずっと「夢みるこども基金」が、みんなにとつて最高の場となることを願っています。

何とも言えない達成感

長尾 怜美



私は、今回の体験を通して次の三つのことを学びました。

まず、二つは、障害者そのものについてです。図書館から借りた何十冊もの本を読み上げながら、障害者自身、それをサポートする家族施設の方々の努力と苦勞。そして、障害者そのものが問題なのではなく、それを取り巻く環境、つまり社会の物理的バリアや制度枠、そして私たち人間の心の持ち方が、最大の問題なのだということを知りました。さらに、こうして勉強し、知ることによって私たちの心や物の見方が変わったように、まず「知る」ということの大切さを痛感しました。

次に、二つの大きなことを成し遂げるということの難しさです。私は、最初、小学校五年生のとき、このイベントに参加しました。渦の中において楽しさだけで終わりました。次に中学生のとき、渦の外から客観的に見ることでできる余裕ができ、スタッフの方々の苦勞を知り、感謝することができました。そして高校生となった今、実際に、今回実行委員として参加し、この渦を自分たちの手で、ゼロから回していくことを体験し、一言では、言い尽くせぬ色々な思いが湧きました。こんなにもゼロから立ち上げていくことが大変で、なんと細々とした手作業の多いこと。自分たちが放課後の時間を割いてやったことがポツとなるむなしさ。何度も投げ出したくなりました。でも、無事に終えた今、なんともいえぬ充実感、達成感に浸ることができました。これもあの苦勞があつたからです。三つ目は、一緒に作業を進めた、友達のが見え、一人ひとりの個性が生かされました。

行動・実践方の一人がアクセルなら、慎重・実直方の一人がブレイキとなり、その中間型の一人がハンドルを握り、私たち三人は中古車ながらも、実にうまく、ガタガタの道を行ってききました。途中、エンストして三人で押したり、ガソリンを補給して、心身ともにリフレッシュしたり、まさに田舎道を走る珍道中そのものでした。

こども宣言にもある「みんな違ってみんないい」は、私たち筑紫女学園のキャッチフレーズですが、友達を通してこんなにこの言葉を実感したとはありませんでした。私はこの夏、このような二つの大切なことを学び、少ししかれたのではないかと思っています。

最後にこういう貴重な体験をさせていただいたことに加え、私たち「実行委員会」のメンバーがくじけそうになつたとき、やさしく励まし、頼りなくも黙つてじつと見守つてきてくださった多くのスタッフの方々から深く深く感謝致します。ありがとうございます。

NHKも後援に

今回のイベントは、これまでご支援いただいた日本歯科医師会、厚生労働省などに加え、NHK福岡放送局、福岡市教育委員会、福岡市身体障害者福祉協会にも後援に加わっていただきました。

またNHK福岡放送局は、ニュース番組でイベントの模様を紹介して下さいました。さらに他の新聞社、テレビ局などの多くの報道機関にもこの模様を取り上げていただき、ありがとうございます。

以上の「バリアフリーの社会を作ろう」のイベントに関する紙面は、「実行委員会」のリーダーを務めた長尾怜美、伊豆丸展代、野口淳美の三人(いずれも福岡市・筑紫女学園高校二年)が執筆、編集にあたりました。

シンポジウムに先がけ ～開会式～

盲導犬、アイマスク、車イス、手話点字、老人歩行など、多彩な疑似体験コーナーを実施したあと、午後0時45分から、2001年夢みることもキャンペーン第七回イベント「バリアフリーの社会を作ろう」シンポジウムのオープニングセレモニーが、陶山賢治南日本放送キャスターと、益子直子フリーアナウンサーの総合同会で幕を開けた。

まず、「夢みることも基金」理事長代行で、福岡県歯科医師会の河野博之会長が「回をかさねる」ことに、夢みることも基金のキャンペーンの輪も大きく広がっています。私たち歯科医師会もしつかり基金を支えて行きたい。特に、今年はず子供たちが中心になって企画から本日の運営にまで取り組んだことに感心しています。」と挨拶。これまでのキャンペーンの経緯と今年の意義について、基金理事の一人であるアグネス・チャンさんがさわやかな声で紹介した。

今年も数多くの作文やイラストが基金に寄せられたが、中でも今回のキャンペーンのメインテーマになった「バリアフリーの社会を作ろう」の作文で最優秀に輝いた、愛知県聖霊中学校一年の下中美香さんが、受賞した作文を読み上げ、会場の人たちから拍手を浴びた。基金はこれまでいろいろな社会福祉やボランティア団体などに活動資金の助成などを行って来たが、今回は目の不自由な方々のために盲導犬二頭(百八十万円)を寄贈することを決め、福岡盲導犬協会へ河野博之理事長代行から目録が手渡された。続いて、すでに開



大山徳次郎福岡盲導犬協会常務理事へ盲導犬二頭の目録を手渡す河野博之理事長代行

校しているバンブーデジュの「夢みることも基金学校」へ校舎増築費が、さらにネパール歯科医療協力会、福岡ネパール児童教育振興会などへの活動助成金が贈られた。

このあと、ミニコンサートが開かれ、鹿児島市から駆けつけてくれた盲目のギタリスト・岡崎勝美さんと、フルート奏者・櫻井直美さんとのコンビによる演奏があり、アグネス・チャンさんの歌とトークで、ぐっと盛り上がりを見せた。小休止のあと、福岡県の筑紫女学院高校2年の松田祥幸君の司会で、

福岡海星女学院付属小学校5年の松田祥幸君の司会で、パネルディスカッションによるシンポジウムが開かれた。ステージには、神田好紀さんをはじめ、ギターを演奏してくれた岡崎勝美さん、横田光春さん、宮本トキ子さんらが上がり、全国から集まったことも会議のメンバーはそれぞれの座席から討論に加わり、積極的な意見をバリアフリーの大胆な提言などで、会場の人たちを驚かせていた。

午後3時20分、ことも会議のメンバーがステージに上がり、それぞれ分担してことも宣言文を力強く読み上げた。最後はいつもの通り、全員が夢みることも基金のイメージソング「ドント・ストップ・マイ・ドリーム」と「傘の中の夢たちへ」を合唱して、閉会した。

最後はいつもの通り、全員が夢みることも基金のイメージソング「ドント・ストップ・マイ・ドリーム」と「傘の中の夢たちへ」を合唱して、閉会した。



作文を朗読する下中美香さん



演奏する琴奏者の岡崎勝美さんとフルート奏者の櫻井直美さん

生命をあずかる盲導犬たちの現状

盲導犬をテーマにした映画やテレビを見て、その素晴らしさに感動した人たちが少なくないでしょうが、視覚障害者たちの生命をあずかる盲導犬たちが、極端に少ないことは余り知られていません。日本では視覚障害者四十二万人、うち全盲の方が十二万人で、盲導犬の貸与希望者が七千六百人に對して、実働の盲導犬はわずかに八百五十頭。いかに不足しているかがうかがえます。

夢みることも基金は今年4月、福岡市で開かれたことも会議で第七回のイベントが「バリアフリーの社会を作ろう」と決まったあと、ことも会議のメンバーや事務局では、福岡県前原市にある福岡盲導犬協会訓練センターをお尋ねして、いろいろなことを学びました。

まず子犬は生後四十五日で親や兄弟から離し、パピーウォーカー(子犬の里親)に引き取られ、約十カ月、里親に世話を受けている間に、人間との繋がりが、人間に愛される喜びを知り、社会のルール、情操を身につけていきます。

そして、満歳になったとき、訓練センターに戻り、体調や性格をチェックされ、合格の可能性のある犬だけ訓練が始まります。

さらに、半年から二年の訓練のあと、視覚障害者と犬が四週間、共同生活するための講習を受け、やっと盲導犬は使用者に手渡されるのです。

といつも、訓練ではじかれ、合格するのはわずか四割。残りはペットとして引き取られたり、繁殖犬や、学校などで活動を理解してもらうための啓蒙犬として活躍しています。

いま、パピーウォーカーのボランティアが不足しています。

パピーウォーカーは無報酬のうえ、エサ代など飼育にかかる費用が約十万円かかるうえ、労力も大変。それだけではなく、数か月後、やっと慣れた頃、犬と別れることになり、ほとんどの人が「あんな悲しい思いは一度としたいくない」と、里親を敬遠してしまいます。

それでも、同訓練センターには、いま三十人のパピーウォーカーの希望登録があり、犬を育てるプロセスが得難い体験となっているようです。

こうした盲導犬育成には、二頭あたりに二百万円から二百五十万円と多額の費用がかかり、その大半を県や市など自治体の助成金や企業、団体、そして個人などからの寄付金などで賄っているのが現実です。

夢みることも基金もこうした現実を学び、少しでも協力できれば、と盲導犬二頭の寄贈を決定しました。

ユーズと呼ばれる視覚障害者の生命をあずかり、日夜、頑張る盲導犬に対する理解は広がっているのですが、それでも無理解から来る社会の壁にぶち当たることも少なくありません。

今回、「バリアフリーの社会を作ろう」のイベント実施を決め、会場を探していたとき、ある会場で「犬を会場に連れ込まれては困ります。(会場を)汚したり、爪で廊下を傷めたりしますのよ」と、会場使用を断られました。

徹底した訓練と教育、しつけが施されたうえに、選抜された盲導犬のことは、それなりに知られているものと考えていただけに、驚きと同時に怒りを覚えました。

夢みる子ども基金理事長 日本歯科医師会会長



白田 貞夫

毎日のように、世間を驚かせるような荒々しい事件が相次ぎ、好むと好まざるとにかかわらず、子供たちも巻き込まれ、いまや子供たち受難の時代といつても過言ではありません。

こんな時代に、子供たちに「未来を信じ、夢を抱いて、前進しなさい」と大人たちが語りかけても、無理なことかもしれません。

そんな時代に、子供たちの小さくて、大きな夢を実現させようと、大人たちが力強く手助けしていくことは大切なことだと考えます。

夢みる子ども基金は、「子供たちの無限に広がる夢を、大人たちも一緒に膨らまし、希望と潤いのある社会をつくりたい」と歯科医院などを中心に協力を求め、スタートしました。

1年、2年そして4年、5年と続けられ、今年で丸7年が過ぎました。子ども基金が最初に抱いた夢は着実に根付き、確実に広がりをみせ始めていることを私も実感します。

昨年、夢みる子ども基金の理事長として、地味ながら確実なその歩みを見ていますが、日を追うごとに子供たちの心に広がり、子供たちの夢を育み、夢の実現に向けて力を発揮してきていることを感じます。

今年、特別に暑く、暑熱地獄のような夏でしたが、子供さんたちが自ら企画し、その実行に当たられ、見事に「バリアフリーの社会をつくらう」というイベントを成功させました。

素晴らしいことです。中でも子供たちが自ら企画し、動き回ってイベントを実行に移したというところに、私は感動しました。これまでの六年間の蓄積が見事に開花したものだと考えられます。

歩幅は大きくなくても、着実に夢みる子ども基金は前進しています。これからは荒れた大地に小さな花を「輪、輪咲かせるように」、子供たちの夢を開花させていきたい、と願っています。日本歯科医師会も、この素晴らしいキャンペーンを全面的に支援して行きます。皆様の一層のご協力をお願い致します。

夢みる子ども基金は、今年も、バングラデシユ・カム・ディ村の「夢みる子ども基金学校」に校舎増築整備費として百万円、「ネパール歯科医療協力会」に三十万円、福岡・ネパール児童教育振興会に十万円を寄付します。また、今年の「バリアフリーの社会を作ろう」のイベントに、あわせ、福岡盲導犬協会に盲導犬二頭(百八十万円)を寄贈します。盲導犬には「夢みる子ども基金」は「クワン」の名前が付きまします。夢みる子ども基金学校等、三団体の活動を紹介します。

「子ども基金学校に明るい日差し」

バングラデシユと手をつなぐ会

フワマン・モクレスール

(博多高校・英語教師)

今年7月21日から8月5日にかけて、バングラデシユと手をつなぐ会の九人のメンバーがバングラデシユ・カラディ村を訪問してきました。村滞在中、地域の教育について、医療についてたくさん話し合いの機会がありました。忙しい日程の中で、夢みる子ども基金学校で丸日を過ごし、子供たちや先生たち、保護者の皆さんと意見交換や交流することが出来ました。

7月29日、夢みる子ども基金学校の訪問日です。早朝から激しい雨が降り始めました。アスファルトで舗装した道路から約200メートルのところ、この学校があります。しかし雨が降ると、この短い区間でも大人さえ歩けないほどぬかるみがひどくなります。このような天候状態の中で、果たして児童生徒の何割が登校するのか、また、保護者の参加もどうなるのか心配しました。私たち、日本からの訪問団は、予定通り学校に着きました。行ってみると、九割以上の子どもが登校していました。また、午後の保護者会にも多数の参加



夢みる子ども基金学校の教師と生徒たち

者がいました。

午前中、私たちは各教室に行き、授業風景や子供たちの状況を見ました。どの子も元気な声で挨拶し、先生たちの質問に返事していました。その後、子供たちは大きな部屋に集まり、歌やコーラス、劇を披露してくれました。どれも素晴らしいものでした。

午後2時から保護者会がありました。学校の将来について、子供の将来についてある程度不安を抱えながら参加した保護者が多くいること気付きました。最初、保護者たちに自由に意見を述べる機会を与えました。ほとんどの人は、来年、教室の増設、図書館や図書の問題、教室の電気、子供たちのトイレなどはどうなるかといったことに強い関心を持っていました。その後、私は、夢みる子ども基金による教室やトイレの増設のことを話しました。保護者や先生たちの顔色が変わり、一斉に拍手を受けました。私自身も昨年学校訪問の際、子供や保護者から与えられた重い責任を軽くすることができ、ホッと帰ってくるものが出来ました。夢みる子ども基金の皆さん、本当に心から感謝の念を申し上げます。ありがとうございました。

福岡ニルマルボカリ小学校

三年目を迎えて

福岡・ネパール児童教育振興会

会長 篠隈 光彦

「ネパールの子どもに教育の」ともしびをテーマに開校した福岡ニルマルボカリ小学校も三期生を迎え入れ、現在、百八十二人の子供たちが通学できようになりました。

この村の家庭は、自給自足で現金収入はほとんどなく、生活環境は大変厳しいものです。最近まで親の貧しさがそのまま子供の将来にも引き続くネパール社会であったようです。しかし、子供の顔に悲しさはありません。貧しさは、彼らの不幸ではな

いようです。無教養による視野の狭さ、衛生面、時間の使い方など、あらゆる面で生じる格差こそが不幸につながるような気がします。

山積みする問題のうち、まず子供たちの初等教育の環境確保に取り組んだのは、この格差をなくし、子供たちが自分自身の将来を夢見て、そしてその夢を実現するために自ら頑張ってほしいと願ったからです。二年経過した今、心あるS.M.C.学校運営委員会や先生はもとより、我が子の教育に消極的だった両親たちにも見守られて、子供たちは確実に成長しています。

最後になりましたが、夢みる子ども基金様より継続してご寄付を賜り、心より感謝申し上げます。貴基金のご趣旨を受け、ネパールの子供たちの教育のため、役立たせていただきました。貴基金のますますのご発展を「祈念申し上げます」。

延べ三百人余の隊員派遣

ネパール歯科医療協力会

理事長 中村 修一

(九州歯科大学助教授)

地球の屋根にあるネパール王国は低開発途上国で、人口二千万人に対し歯科医師が、約百人程度しかいない。このようなネパールで私たちは、1989年から歯科保健医療協力を始めた。そして、今日までに十四回のミッションを現地派遣し、二万六千八百三十八人の村人に歯科診療や健康教育を行ってきた。十四回のミッションに参加した隊員は延べ三百四十四人を数える。

私たちの活動を振り返ってみると、初期段階では診療中心であったが、徐々に予防歯科や、村の小学校でのブラッシング指導やフッ素の洗口、巡回歯科保健の展開など保健活動を取り入れてきた。また、1994年からは、村の小学校の先生やヘルスポストの職員を対象とした、現地口腔保健専門家の養成プロジェクトを開始。今日までに百五十人のメンバーを養成した。現在では、テョウ村、ダバケル村、アネット村の三つの村で、学校の先生により自立的な歯科健康教育が実施されている。また、二年前から村のマザーボランティアグループの要請により、専門家養成にマザーグループのコースを設けた。養成コースを終

夢みる子ども基金理事



アグネス・チャン

2001年新世紀初めての第七回夢みる子どもキャンペーンは、例年に比べ、暑い夏で、参加した子供たちをはじめスタッフの方々も大変でした。

今年のキャンペーンは、「バリアフリーの社会を作ろう」ということで、初めて、子供たちによる「実行委員会」を組織。何回も会議を開いたり、施設の見学などを重ね、子供たちの力で出来る限りのことをやったりと聞いています。その点、夢みる子ども基金のイベントも、七回目にして新局面が開けてきたと感動しました。殺伐とした社会にあつて、子供たちの夢を大人たちもいっしょに実現させていこうとして始まった、夢みる子ども基金の基本コンセプトは、今年さらに大きく広がったような気がします。

バリアフリーの社会をつくる、といつてもそう簡単に、短期間には出来るものではありません。まして、バリアフリーに関しては、世界の国々と比べ、日本はどちらかといえば遅れているわけで、目指すべきバリアフリーの社会を築きあげるまでには、まだまだ膨大な日時が必要でしょう。

子供たちもそのことを知っているから、その社会を実現するためにはどうすればいいのかわからず、今回のイベントを起点に、長いスパンで取り組もうとの意欲を感じました。特に「子ども宣言」は、素晴らしいと思います。今年は特段に暑い夏でしたが、そんな暑さを吹き飛ばし、大勢の人たちに感動を与えるイベントになったことを、心から喜びたいと思います。そして、自分たちが描いた夢を、自分たちの力で実現していくという、今年の取り組みは、文字通り「夢みる子ども基金」そのもので、キャンペーンに新たな道筋がついたということです。子供たちの純粋な気持ちと努力が、いつか大きな実を結ぶことを信じています。

了したマザーグループは、村の成人を対象に健康教育が出来たようになった。昨年からは、活動に母子保健専門家も参加し、母子保健に取り組んでいる。本年度、新しく開発する事業に小学校の子供たちの園の健康大会がある。担当は、今回参加する隊員の中から園科学生生五名があたる。今年の夏からプロジェクト準備を行っているが、夢みる子ども基金からの助成金はこのような学校園科保険の活性化に使わせていただく予定である。

盲導犬「はつクワン号」の

寄贈に感謝

財団法人福岡盲導犬協会

常務理事 大山 徳次郎

目の不自由な人にとつての最大の願望は、他の助けを受けることなく、いつでもどこでも自由に単独で行動したいということであり、その願望をかなえてくれるのが盲導犬であります。

当協会は、目の不自由な方の自立更生を図るため各界各方面のご支援を得て昭和58年9月設立、次いで昭和62年10月に訓練センターを建設、これまでの盲導犬育成頭数は百十六頭になりました。

今回、夢みる子ども基金第七回イベント「バリアフリーの社会を作ろう」に盲導犬二頭が参加、多数の子供たちには盲導犬の体験歩行を通じて理解を深めていただきました。その際、同基金から、このイベントの一環として、盲導犬二頭の寄贈をいただくことになりました。

当協会として、このご芳志に沿つて可能な限り早期に優秀な盲導犬「夢みる子ども基金はつクワン号」を育成して、目の不自由な人に対して貸与することになります。



5月5日(ごまの日に) 夢みる子ども基金のホームページができました。

今年の5月5日に基金のホームページを開きました。まず、基金にとつてホームページが必要かどうかの検討をした結果「子供たちの夢をかなえるための活動をしていても誰も知らなければ、活動の意義が伝わりません。知られることによって多くの方々のご理解やご協力がえられます。また子供たちの夢は「地区のものではなく、世界へ羽ばたくものであり、多くの人たちに知っていただくためにもホームページの必要性が出たのです。」

ページ数は十六ページ、使用写真枚数は六十枚。基金の理念、システム、キャンペーン参加園科医院の状況、夏のイベントを中心とした、これまでの活動状況などを紹介しています。また、世界のどこからでもアクセスし易いようにインターネットナビ(当基金の電話番号でつながる)システム導入等工夫して作成しました。今回ホームページを作成していただいた長島善康さん、夏のイベント実行委員会スタッフに聞きました。

一問答は次の通り

● ホームページを作るにあたって気を配ったことはどんなところですか？

長島「いろんなホームページを構築してきましたが今回は少し苦慮しました、それは①子供たちに見易く・分かり易く・見て楽しく②大人・園科医院の方々も楽しんで見ていただける③見てあきないホームページにする④子ども基金とは何なのかを、キリ訴えると同時に、キャンペーン参加へのご協力をお願いなどを工夫しました」

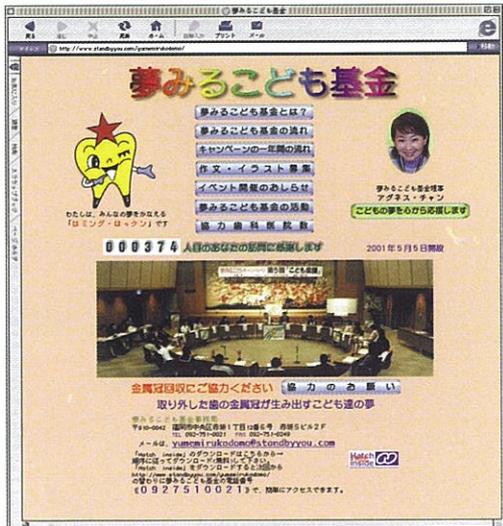
● 分かり易いホームページだと思いましたが、中でも念頭に置いて制作に当たられたことは何ですか？

長島「子供たちの生き生きした姿や、笑顔や、作品を記録として残して置きたい、ということですね」

● 記録やアルバムというところがいいですね。長島「そうですね。情報社会と言いますが、最新の情報だけに価値があるというわけではありません。むしろ、記録的なものや、積み重ねられてきた歴史の中に大きな価値があることも多いのです。子供たちの笑顔は何年、何十年経つても、やはり見た人に暖かいものを与えてくれるでしょう」

● これからもイベントの記録等が追加されて行くわけですね。長島「はい、今回開催されたイベントについても、資料が揃った次ホームページに掲載したいと思っています」

● 最後に何かありましたら。長島「ホームページは生き物です。常に活性化することで協力者も増え、信用にもつながります。今後ともこのホームページをより充実させていき、一日も早く世界の人達に見ていただける様になりたいと思います」



子どもの夢が
かなってしまうまで！

① 作文・イラストの募集
毎年12月1日～翌年1月末に「私
がかなえたい夢」をテーマに公募。
対象は全国の小学4年生～中学
2年生まで

② 審査
夢みる子ども基金事務局に
て作文・イラストを審査の
うえ、入賞者を決定。



③ 子ども会議

春休みに入賞者を招待し、
「子ども会議」を開催。夏
の「夢のイベント」を決定

④ 夢のイベント
夏休みに入賞者を
招待し、夢を実現
させるイベントを
開催



※詳細はホームページをご覧ください

キャンペーン満七歳に!!

歯の金属冠リサイクルで二十一世紀を担う子
供たちの夢を育み、恵まれない子どもたちへの福祉にも役
立てようと、一九九四年(平成六年)福岡市で始まった「夢み
る子どもキャンペーン」(主催 夢みる子ども基金)理事長
白田貞夫日本歯科医師会会長が今春で満七歳を迎えま
した。
このキャンペーンは、日本歯科医師会の全面的な協力と
厚生労働省などの後援でスタートしました。これまでに四
十七都道府県の二七八三件の歯科医院、大学病院、関係医
療機関が参加。寄せられた浄財は二億円を超えました。
これらの貴重な浄財をもとに、夏休みに子供たちの夢を
かなえるイベントを開催したり、ボランティア団体などへの
寄付を続けています。
今後とも歯科医院の先生方を始め、一人でも多くの方たち
のお力添えをいただき、キャンペーンの輪をさらに広げ、大
人も子供たちと一緒に夢を見続けたいと思います。
皆さまの層の厚いご協力を支援をよろしくお願いいたします。

これまでの夢のイベント

- H7.7.27 第1回 -阿蘇子ども出会いの里- (熊本県・久木野町)
阪神大震災で両親を亡くした子供たちを阿蘇に招きホームステイ。
子ども会議の子供たちや地元の子供たちと大自然に触れ、交流
を深めた。
- H8.7.25~27 第2回 -阿蘇子どもみどり村- (熊本県・久木野町)
子ども会議のメンバー18人、筋ジストロフィーの少年ら26人、阿蘇
宿泊先の子、理事らを含め総勢約200人が参加。雄大な自然
の中で交流を深めた。
- H9.7.21~22 第3回 -世界の子どもと手をつなごう-
(福岡市・大手門会館)
子ども会議のメンバー16人、筋ジストロフィーの少年ら20人、バン
グラデシュのカラムディ村から3人、関係者も含め総勢約150人が
参加。カラムディ村に「夢みる子ども基金学校」建設資金を贈呈し、
またナバル歯科医療協力会にも活動資金を寄贈した。
- H10.7.24~25 第4回 -夢の放送局- (福岡市・キャナルシティ博多)
キャナルシティ博多のサンプラザで開局。子供たちの夢トークや、
筋ジストロフィーの少年バンドによるライブが行われた。また、一般市民
を巻き込んで、市内中心部をラブウォークし、バングラデシュの
学校教材費のために募金を呼びかけた。
- H11.8.8~9 第5回 -ケーキがつなぐ友情の輪- (熊本県・南関町)
5年前に熊本県阿蘇での第1回目のイベントに参加した子供たち
やホームステイ先の方々なども一緒に大々的なケーキ作り
に挑戦。出来上がったケーキを児童養護施設へプレゼントした。
- H12.8.6 第6回 -アフリカの大地に根付け
子どもたちの願い- (福岡県・宇美町)
農家・松田好亮氏宅にて開催。内戦で苦しんでいるアフリカ
スダンに贈る食物の種子を収穫し、ユニセフへ贈呈。その後、
竹トンボ・竹馬を作り、子供たち全員で遊んだ。翌日、児童養護
施設 和白青松園(福岡市)に贈呈した。また、世界子ども音楽
祭も開催。
- H13.8.5 第7回 -バリアフリーの社会を作ろう-
(福岡市・TNC放送会館)
疑似体験コーナー(盲導犬・車イス・点字・手話・老人)を設置して、
子供たちが様々な障害を実際に体験した。これをもとに「子ども
シンポジウム」を開催。バリアフリーについての子供の意見をまとめ、
「子ども宣言」として小泉首相や各種行政機関などへ届けた。

都道府県別参加登録歯科医院内訳

都道府県	数	都道府県	数	都道府県	数
福岡	502	静岡	17	島根	5
大分	202	茨城	16	香川	5
鹿児島	146	新潟	14	愛媛	5
東京	131	福島	14	石川	5
山口	103	群馬	14	岩手	5
長崎	72	愛知	14	和歌山	4
神奈川	65	栃木	13	滋賀	4
宮崎	61	宮城	10	秋田	3
熊本	57	長野	11	京都	3
佐賀	58	三重	9	富山	2
沖縄	34	広島	9	福井	2
北海道	33	岡山	8	奈良	2
埼玉	33	青森	6	高知	2
兵庫	27	山梨	6	鳥取	1
千葉	20	山形	6	徳島	1
大阪	17	岐阜	6		
				平成13年8月現在	合計 1783件

キャンペーンのあゆみ

- H 5. 6.22 第1回準備会
- H 6. 2.14 キャンペーンスタート
4.22 マスコットキャラクターの愛称「はっくん」に決定
12.29 第1回 作文・イラスト募集
- H 7. 3.29 キャンペーン推進組織「夢みる子ども基金」設立
第1回子ども会議(福岡県歯科医師会館・大ホール)
7.27 第1回イベント「阿蘇子ども出会いの里」開催
- H 8. 1.1 第2回 作文・イラスト募集
3.24 第2回子ども会議(福岡県歯科医師会館・大ホール)
3.26 神戸市にクスの苗木、ピースばらを贈呈、植樹
5.18-19 九州デンタルショーに出展(福岡国際センター)
7.25 第2回イベント「阿蘇子どもみどり村」開催
11.9-10 九州歯科医学大会に出展(熊本県)
12.10 第3回 作文・イラスト募集
- H 9. 4.6 第3回子ども会議(アクロス福岡・国際会議場)
5.17-18 九州デンタルショーに出展
7.21 第3回イベント「世界の子どもと手をつなごう」開催
10.25-26 九州歯科医学大会に出展(鹿児島県)
12.10 第4回 作文・イラスト募集
- H10. 4.5 第4回子ども会議(アクロス福岡・国際会議場)
5.16-17 九州デンタルショーに出展
7.25 第4回イベント「夢の放送局」とラブウォーク開催
10.10-11 アジアパシフィッククリニシャンズ
デンタルミーティングに出展(福岡市)
10.24 九州歯科医学大会に出展(宮崎県)
12.10 第5回 作文・イラスト募集
- H11. 3.28 第5回子ども会議(福岡県歯科医師会館・大ホール)
5.29-30 九州デンタルショーに出展
8. 8-9 第5回イベント「ケーキがつなぐ友情の輪」開催
12.10 第6回 作文・イラスト募集
- H12. 4.2 第6回子ども会議(あいれふ10階・講堂)
5.13-14 九州デンタルショーに出展
8.6 第6回イベント「アフリカの大地に根付け
子どもたちの願い」開催
12.10 第7回 作文・イラスト募集
- H13. 4.1 第7回子ども会議(KKRホテル博多)
5.12-13 九州デンタルショーに出展
8.5 第7回イベント「バリアフリーの社会を作ろう」開催